20230910 「私も罪人?! 罪があるって?!」 ローマ 3:9、10、23、24

牧師 中谷美津雄

＜導入＞

変な説教題になりました。俳優や声優さんなら、どんな風に読むかなぁと思います。皆さんだったらどのように読みますか？

教会に来ていても、罪が分からないという人がいますね。前の教会に 80 を過ぎたニコニコ笑顔のおばあちゃんが、娘の受洗をきっかけに来られるようになりました。熱心な仏教徒で、通っているお寺の暦を毎日見て暦に従って生活している人でした。その方はイエス様を信じたいけれども罪が分からないと言っておられました。分かるように祈りましょうとお祈りしてから数日後、分かりましたと、いつも以上の笑顔で話してくださいました。祈っていたら、何年も前に近所のご婦人のためと思って何かを話したことで、その人を傷つけてしまったことを思い出したと言うのです。間もなく洗礼を受け、仏教関係のものを全部捨てて、礼拝と木曜の女性会に励まれ、病に臥せるようになってからも、兄弟姉妹の祈りの課題を聞いて祈る人になりました。

とっくに忘れてしまっていたような小さな出来事を通して、この方は自分も罪人で、自分にも罪があると気が付いたのでした。そして、自分の罪に気付くことで、イエス・キリストが十字架にかかって死なれたのは、自分の罪を赦すためだったと分かって信じることができ、イエス・キリストから本当の笑顔、喜びと愛を頂いたのでした。

今、教会の祈祷会で学んでいる「ハイデルベルク信仰問答」を 2020 年7月から 2022 年の 1 月までの約1年半、礼拝の中で交読していましたが、その後礼拝では中断して祈祷会で学ぶようになりました。

この信仰問答は、序論で「ただ一つに慰め」という主題を示し、その後はその慰めを得るために必要なことを三つ語っています。「第一部」では「どれほどわたしの罪と悲惨が大きいか」について語り、第二部では「どうすればあらゆる罪と悲惨から救われるか」について、では「どのようにこの救いに対して神に感謝すべきか」を語っています。

自分の罪が分からなければ、キリストの十字架の愛と赦しは分からない。キリストの愛と赦しが分からなければ、苦しみ悩みの多い人生を生きる喜びも慰めも得ることができず、感謝もできないということです。

礼拝で教団の信仰告白について学び、第 4 項人間論を 3 回に分けて学んできましたが、今日が最後です。この第 4 項は二つの部分からなっています。前半は、最初の人について神のかたちに創造され、神との正しい関係にあったけれど、サタンに誘惑され、神のいましめに背いて罪を犯し、神のかたちをこわしてしまったということでした。

今日は、後半でアダムの子孫であるすべての人についての告白です。第 4 項の後半を一緒に読みましょう。

「それゆえ、すべての人は生まれながら罪と悲惨、死の支配のもとにあり、思いと言葉と行為とにおいて罪ある者である。自分の努力によっては神に立ち返ることができず、永遠の滅びに至る。」

Ⅰ．すべての人は罪の下にある。

ローマ 3:9、10 を読みます。

9 では、どうなのでしょう。私たちにすぐれているところはあるのでしょうか。全くありません。私たちがすでに指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も、すべての人が罪の下にあるからです。

10 次のように書いてあるとおりです。「義人はいない。一人もいない。

ローマ人への手紙は使徒パウロがローマ帝国の中心地ローマにいるクリスチャンたちに宛てて書いた手紙です。パウロはローマにいる人たちにもぜひ福音を伝えたいと願ってローマに行く計画を何度も立てましたが、道が開かれませんでした。それで、自分が伝えようとしている福音を手紙に記して送ったのでした。

他の手紙は宛先の教会や個人が抱えている具体的な問題に福音の光を当てて書いているのに対して、ローマ人への手紙ではパウロの伝えていた福音が理路整然と語られています。1～11 章で教理を語り、12 章以下で人キリスト者の生き方を記し教えています。

前半の教理の部分は、1:18～3:20 で人間の罪について語り、3:21～5 章で信仰によって与えられる神の議について語り、6 章～8 章でキリストによる勝利について、9～11 章で選民イスラエルの救いに

ついて語っています。これで分かるように、パウロも人間の罪について語ることから始めているのです。「ハイデルベルク信仰問答」も「どれほどわたしの罪と悲惨が大きいか」を知ることから始まっていました。最初にお話ししたおばあさんも私にも罪がある、私も罪人だと分かった時に、キリストを信じることができ、救われる喜びを頂いたのでした。

Ⅱ．罪の表れ（罪の実）

ですから、私も罪人で、私にも罪があるということを知り、素直に認め、悔い改めることが重要です。

パウロは先ほどもお話ししたように、ローマ 1:18～3 章で人間の罪について語っているのですが、その前半 1:18～32 では異邦人の罪について語っています。そこでは被造物、即ち、神が創造された世界を見れば、目に見えない神の永遠の力と神性がはっきり分かるのに、神を神としてあがめず、感謝もせずに、造られた物を拝む偶像崇拝の罪を犯し、更には性的な罪を初め、その他様々な倫理道徳的な罪を悪いと知りながら行っていると書いています。29～31 の罪のリストを読みましょう。

29 彼らは、あらゆる不義、悪、貪欲、悪意に満ち、ねたみ、殺意、
争い、欺き、悪巧みにまみれています。また彼らは陰口を言い、
30 人を中傷し、神を憎み、人を侮り、高ぶり、大言壮語し、悪事を
企み、親に逆らい、
31 浅はかで、不誠実で、情け知らずで、無慈悲です。

この罪のリストを見ると、自分には関係ない、当てはまらないと言える人はいないのではないかと思うのですが、どうでしょう。

例えば、「貪欲」は、心の中の問題ですね。実際に他人の物を欲しがったとしても、盗んでいなければ、罪にはならないと言い訳するかも知れません。実際、国の法律で罪ありとして裁かれることはないでしょうが、それでもパウロは罪のリストの中に入れているのです。何故でしょう。これはモーセの十戒の十番目の戒めと関係しています。それは貪欲を禁ずる戒めでした。申 5:21

21 あなたの隣人の妻を欲してはならない。あなたの隣人の家、畑、
男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを欲し
がってはならない。

「盗んではならない」という戒めが第8番目にあります。たとえ欲しがっても、実際に盗んでいなければ、第8番目の戒めを守っていると言えるかもしれませんが、第10番目の戒めで、心の中の思いまで踏み込んで貪欲を規制しているのですから、神の御前ではそうはいかないのです。

同じことが第6番目の戒め「殺してはならない」についても言えます。殺人事件を犯していなくても、「殺意」を持っていることで神の御前では罪なので、パウロは罪のリストに加えているのです。

この第6番目の戒めについてイエス様はマタイ 5:21、22 で当時の律法学者たちの解釈の間違いを正して教えられました。

21 昔の人々に対して、『殺してはならない。人を殺す者はさばきを
受けなければならない』と言われていたのを、あなたがたは聞い
ています。
22 しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に対して怒る者は、
だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に『ばか者』と
言う者は最高法院でさばかれます。『愚か者』と言う者は火の燃
えるゲヘナに投げ込まれます。

「怒る」こと、これは心の中の問題です。たとえ心の中での事であっても、神の御前では殺人と同罪として、裁きを受けなければならないとイエス様は言われるのです

更に、「『ばか者』と言う者は最高法院でさばかれます。『愚か者』と言う者は火の燃えるゲヘナに投げ込まれます」と言われます。これは、「言う者」ですから、ことばの問題です。ただ言っただけで殺してはいないと弁解するかも知れませんが、神の御前では第6番目の戒めを破った者として裁きを受けなければならないと主は言われるのです。

十戒の第7番目の戒めは「姦淫してはならない」です。これについても、イエス様はマタイ 5:27～28 で同じ理屈で言われました。

27 『姦淫してはならない』と言われていたのを、あなたがたは聞いて
います。
28 しかし、わたしはあなたがたに言います。情欲を抱いて女を見る

者はだれでも、心の中ですでに姦淫を犯したのです。

ぐうの音も出ないと言ったところですが、モーセの十戒の十番目の戒めが、人の行為を生み出す心の中まで規制しているので、第9戒より前の戒めも、外面に表れた行為だけではなく、内面に潜んでいる思いにまで踏み込んで適用されるのです。

「すべての人が罪の下にある」、「義人はいない。一人もいない」とローマ 3:9, 10 にある通りです。又、教団の信仰告白で「思いと言葉と行為とにおいて罪ある者である」と言われている通りです。

しかし、問題は、人間なんて皆そんなもんだから仕方がないと諦めたり、当然だと開き直っていると、悔い改めには結びつきません。他人を見て、人混みに紛れ込み自分を隠しているのではなく、神の御前に一人出ることが必要です。私たちも罪人、私たちにも罪があると言うのではなく、私も罪人、私にも罪があると、一人神の御前に出ることです。使徒信条を今日も告白しましたが、主語は何でしょうか。「我は…信ず。…我は…信ず。…我は・・・信ず。」と、3度繰り返しています。主体的な信仰として神に向かって告白することを思わされます。そしてそれが大事なことですね。

Ⅲ. 自分の努力では救われない

聖なる神は、人の心の中の罪やことばで犯す罪までご覧になって裁かれるとなると、教団の信仰告白で、「自分の努力によっては神に立ち返ることができず、永遠の滅びに至る」とあるのは、アーメンその通りだと思わされます。ガラテヤ 3:10, 11 を読みます。

10 律法の行いによる人々はみな、のろいのもとにあります。「律法の書に書いてあるすべてのことを守り行わない者はみな、のろわれる」と書いてあるからです。

律法の行いによって義と認められようとすれば、10 節の鍵括弧の中にあるように、律法の書に書いてあるすべてのことを守り行わ」なければなりません。律法は百点満点を要求するからです。しかし、野球の好打者であっても、ヒットの割合は三割ちょっとに過ぎません。十割なんてとても無理、できるはずもありません。律法も同じです。ですから、11 節は続けて言います。

11 律法によって神の前に義と認められる者が、だれもいないということは明らかです。「義人は信仰によって生きる」からです。

律法の行いで義と認められる人は誰もいない。アブラハムの時代から「義人は信仰によって生きる」と言われている通りだというのです。

使徒パウロ自身、「律法による義については非難されるところがない者（ピリピ 3:6)」と、自分を誇るほど律法に熱心な人でしたが、ローマ 7:18, 19 に記している自分の惨めさに気付いて、復活の主と出会ったことでイエス・キリストを信じる信仰よる義に与ることができました。

18 私は、自分のうちに、すなわち、自分の肉のうちに善が住んでいないことを知っています。私には良いことをしたいという願いがいつもあるのに、実行できないからです。

19 私は、したいと願う善を行わないで、したくない悪を行っています。

三浦綾子さんの「塩狩峠」の主人公永野信夫は真面目な人で、自分の罪が分からないでいた時に、路傍伝道をしていた牧師の話に感動して、キリスト信者になってもよいと思いました。その時、その牧師から、「あなたの罪がイエス・キリストを十字架につけたことを認めますか」と聞かれました。キリストを十字架につけるほどの罪は自分にはないと思い、そう伝えました。すると牧師は聖書のみことばの一つでも徹底的に実行してみるように勧められたので、信夫は良いサマリヤ人のように「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい（マルコ 12:31）」を徹底的に行おうと努力しました。職場で罪を同僚をかばって、彼と一緒に旭川の転勤するほど愛することに努めたのですが、その同僚からうるさがられ疎まれて言い合いになった時、信夫は初めて彼を心な中で憎み罵っている自分の罪に気付き、キリストの十字架の愛と赦しが自分自身のためであったことを信じることができたのでした。

自分の努力によっては神に立ち返ることはできないと、教団の信仰告白で言われていますが、まことにその通りです。

神の御前に一人出て、「私も罪人、私にも罪があります」と認めて、その罪を赦すために十字架に死んでくださったイエス様を信じて、救いに与らせていただきましょう。

＜祈ります＞

聖なる神様、あなたの御前に私も罪人であることを認め告白します。自分の力で自分を救うことのできない罪深い者です。そんな私を愛して、罪のない神の御子イエス・キリストが十字架にいのちを捨て、私の罪を赦してくださったことを信じて感謝します。赦されたことを信じ、感謝します。これから後、神様を愛し、隣人を愛して歩めますように。弱い者ですから助け導いてください。

救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。